

研究紀要

第 107 集

研修機関における講座の在り方	企画調査課	1
学校週 5 日制における学校運営等の実態調査	義務教育研修課	11
高等学校におけるボランティア教育についての研究	高校教育研修課	21
マルチメディア時代の教育機器に関する考察	越智秀三郎	33
子どもにはたらきかける教室環境づくりについての研究	井上 正弘	39
ゲンジボタルの飼育をとおした環境教育への試み	松尾 光明	49
「ひょうごっ子悩み相談センター」の相談活動から —望ましい人間関係の育成に向けて—	古田 昇	57
物理の波動と二体問題の探究活動の事例	江本 博明	63
ホームルーム活動の活性化に向けて —初任者研修における班別協議から考える—	藤井 義一	69

平成 8 年 5 月

兵庫県立教育研修所

はじめに

今日ほど、教育に多くの課題が投げかけられている時代はないと思われませんが、同時にまた、教育に対する期待も大きく強いものがあります。

これら多くの課題と強い期待に応えるためにも、教職員のたえざる研修は必須であります。

当教育研修所では、当面する教育課題に視点を当てながら、所員一人一人が調査・研究を行っています。

本紀要には、所員の研究のうち、共同研究3編、個人研究6編をまとめました。これらが学校での教育実践のお役に立てば幸いです。

本研究について、率直な御批判と御指導をお願いいたします。

最後になりましたが、調査、研究に御協力いただきました皆様に対して厚くお礼を申し上げます。

平成8年5月

兵庫県立教育研修所長

陰 山 茂

研修機関における講座の在り方

企画調査課

はじめに

昨今のように、情報化、国際化、高齢化など社会の変化の激しい状況を目の当たりにすると、それに対応した教育の在り方も再考されなければならない。新しい学力観に立つ教育の具現化においては、教育の質的水準を高めることや、教員の資質能力の向上が求められている。また社会の変化に対応する児童生徒の育成を図るためには、教員自らの意識改革が必要になってくる。

学校教育の直接の担い手である教員の活動は、日々成長していく児童生徒の人格形成や心身の発達に大きな影響を及ぼすものである。それゆえ教員には、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、児童生徒に対する教育的愛情、教科に関する専門的知識、広く豊かな教養、そして実践的指導力を兼ね備えることが求められている。

当所においても、受講者が主体的、意欲的に研修に参加し、一人一人のニーズに応じてそれぞれの能力を高めることができるような、効果的な研修方法を探っている。

当所の企画調査課で行った平成5年度の共同研究「教育研究所における効果的な研修方法についての考察」では、全国の教育研究所及び教育センターで実施されている研修講座をもとに、研修方法の在り方について調査研究した。また、平成6年度の「教育研修所における研修の効果的な在り方について」では、当所の受講者を対象にしたアンケート調査により、研修方法の在り方について考察してきた。本年度は、これらをもとにして、研修機関における講座の在り方について取り組むことにした。

昭和62年12月の教育職員養成審議会の答申では、「現職研修については、日々の教育実践が教員としての力量を高めることは確かであるが、更に、別の角度からの研修を通じて教育実践の在り方を見直すことも重要であり、このような研修を組織的、体系的に実施

する必要がある」と記され、現職研修の体系的整備として、

- ア 各教員が教職の全期間を通じて必要な研修に参加することができる機会を確保すること。
- イ 国・都道府県・市町村等の各段階における研修が相互に関連を持って行われるようにすること。
- ウ その際、社会の進展に対応して、研修内容を絶えず見直し、整備すること。また、社会の構成員としての視野を広げるという観点から、学校以外の施設等における体験を積極的に取り入れること。

という三つの観点が示されている。

そこで、このうちのイ、ウの観点到立って、現在実施している研修講座を振り返り、研修における今日的課題を明らかにし、その解決の足がかりとするための研修講座の在り方を探る。

1 研修における二つの視点

新しい学力観に立つ教育の推進の中では、教育観、指導観、評価観等の変革が求められている。学習指導に関する「指導技術」「教材研究」「教材づくり」等、教育実践を中心としたものはもとより、教員自ら、人間性の涵養に努め、教育者としての自覚を促し、自己変革していく研修が必要になってくる。

教員研修とは、一人一人の子どもの望ましい変容、つまり、人間としての成長・発達を促すことを究極的なねらいとして、教員が行う活動であるといわれる。このことは、教員自ら日々の教育実践を通しながら、その力量を高めていくことが基本になる。しかし、研修を通じて教育実践の在り方を見直し、教育の今日的課題の解決に取り組むことも必要となる。そのためには、教員が意欲的に参加できる研修を提供する研修機

関の役割も重要な要素となる。

新しい学力観に基づく教育の推進においては、専門的、技術的研究はもとより、教員に必要な社会の変化に対応できる柔軟な思考力や判断力を身につけ、自ら課題を見つけ、解決する手順を組み立てる力をつけ、指導者としての力量を高めることが求められている。すなわち、教育技術・方法等の研修もさることながら、教育者としての資質能力の向上をめざす研修に重点をおくことが、これからの研修にとって必要であり、教員の資質能力の向上や、意識変革に取り組むことが、これからの研修における課題であると考え。

そこで、課題の解決をめざす研修の在り方を、次の二つの視点を通して考察していくことにする。

- 教員としての基礎・基本
- 社会の変化に主体的に対応する力量

学校は、人格ある児童生徒を前にして、知識や技術を教える場だけではなく、人間としての在り方や生き方を考えさせたり、生涯にわたり学び続けるための学び方を学ぶ場でもある。そのために教員は、教えるための技術や教えるための知識、俗にいわれる専門性、指導力を磨くことはもちろんのこと、教員自ら豊かな感性や、感受性を身につけ、心豊かな人間であることが求められる。このことは職能であり、目の前にいる児童生徒とのかかわりの中では、最も重要なことであると考えている。このように教育者としての職務への態度や、豊かな人間性に基づく幅広い基礎教養などの力量を培っていくことを、教員としての基礎・基本ととらえ、このことを加味した研修を実施することが大切である。

情報化、国際化、高齢化等、社会は目まぐるしく変化している。この変化にどれだけ学校、教員が対応できているかということが問われている。このような社会の変化に対応するためには、社会の動向に積極的に目を向け、その中で、教育に求められるもの、教育の中で取り組まなければならないものなどを明確にし、日頃の教育活動の中に取り入れていくという力を身につけることが教員に求められている。すなわち、社会の変化に主体的に対応できる力を培うことも研修にとって大切なことである。

このように「教員としての基礎基本」「社会の変化に主体的に対応する力量」の二つの視点は、教育の今日的課題の解決をめざす研修の在り方を考えるにあたっての柱ととらえている。この視点に立って研修を企画運営することにより、自ずと人間性の涵養、教員としての指導技術、専門的な知識等の習得、さらには社会の変化に対応していくために、教員自ら今日的課題に対処する力の習得が期待できると考えている。

2 研修機関の役割

(1) 研修にあたっての基本理念

教員研修の中核施設である研修機関の役割は、教養審の答申にあった教員研修の改善についての提言の観点イ、ウに基づいた現職研修の実施である。観点イについては、都道府県・市町村で行われている研修に対する連携及び協力体制等の整備であり、観点ウについては、研修プログラムの編成に対する整備である。ここでは、研修講座を企画する上での基本的な理念を設定し、それに基づいて講座を開設することになる。そこで、研修における基本理念を当所の例で考えてみたい。

兵庫県立教育研修所の設置及び管理に関する条例（昭和38年4月1日 条例第41号）では、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第30条の規定に基づき、教育関係職員の研修及び教育に関する専門的技術的事項の研究を行うため、兵庫県立教育研修所を置く」とある。そして、その業務は、

- ア 教育関係職員に研修を行うとともに、その研究を助成すること。
- イ 教育に関する専門的技術的事項の研究を行うこと。
- ウ 教育に関する各種調査を行うこと。

（以下省略）

と位置づけられている。

そこで先の提言とこの条例を関連づけて、観点イについて見てみると、兵庫県内の各教育研究所及び教育センターで平成6年度に実施された講座数（管理職研修、初任者研修、年次研修は除く）は、教科に関するものが224講座、課題教育・領域に関するもの396講座あった。延べ日数にすると2123日、受講者総数は、延べ43,201人である（兵庫県内教育研究所連盟 平成6年度現職教育講座実施状況より）。当所においても、

年間81講座、235日（平成6年度一般講座のみ）実施している。単純に計算すると、一日7～8講座に約150人の教職員が県内の教育機関において研修に参加していることになる。

また、観点ウについては、昨年度の共同研究「教育研修所における研修の効果的な在り方について」のまとめの中で、教育研修所で行う研修方法は、①バラエティーに富む方法で、②時間配分に工夫をして、③適切な場所で積極的に教育機器等を活用した研修といったパターンが望ましいと考察している。また本年度、当所での受講者による受講しての感想意見からみると、年齢によって差はあるものの、教育以外の話や、教育関係以外の講師の講義をとく、リラックスできるもの、楽しいものといった内容を望んでいる。

これらのことを加味して当所では、研修講座の編成にあたり、次のような基本理念を掲げた。

<基本理念>

科学技術等の著しい進展によって、我々の生活に便利さをもたらした20世紀は、国際化、高齢化、情報化等といった従来にはなかった社会的変化をみせつつ新しい世紀を迎えようとしている。教育においても、変革が求められていることはいまでもないところである。

このような大きなうねりの中で、本県の児童生徒についても、豊かな心と自ら学ぶ力を育み、教育水準の維持向上を図ることは、すべての県民が期待するところである。その期待を受けて、本県の教育は今まさに「明日を担うこころ豊かな人づくり」を基調に、新しい学力観に基づく教育の創造と実践を推し進めており、当教育研修所においては、本県教育の目的達成のため、教育関係職員の研修や専門的、技術的研究に邁進しているところである。

新しい時代の中にあって、当教育研修所は新しい学力観に基づく教育の充実を図るため「教職員の資質の向上」を目標に事業を進めている。特に教職員研修については、社会の変化に対応できる柔軟性や判断力を身につけ、自ら課題を見つけ、自ら解決する手順を組み立てる力をつける教育、いわゆる新しい学力観に基づく教育の推進を基調

とした指導者としての力量向上を図るため、さらに充実したものに努めていきたい。

実際の研修講座の編成にあたっては、学習指導要領における四つの改善のねらい、本県の指導の重点における六つの重点課題、また、県内各教育機関及び当所の講座受講者等の要望意見、さらには、講座担当者の意見等を加味して、講座を編成していくという講座編成体系図（次ページ体系図）を作成し、講座企画に取り組んでいる。

研修における理念は、社会的背景をもとに、教育の今日的課題にかかわって、その解決のための方法、教員の資質能力の向上、行政的施策の実施、さらには新しい学力観に基づいた児童生徒の育成等、研修を実施するにあたっての基本的な考え方を明らかにすることである。そして、各研修機関においては、この理念を十分に共通理解した上で、具体的な研修講座が計画され、実施されなければならないのである。

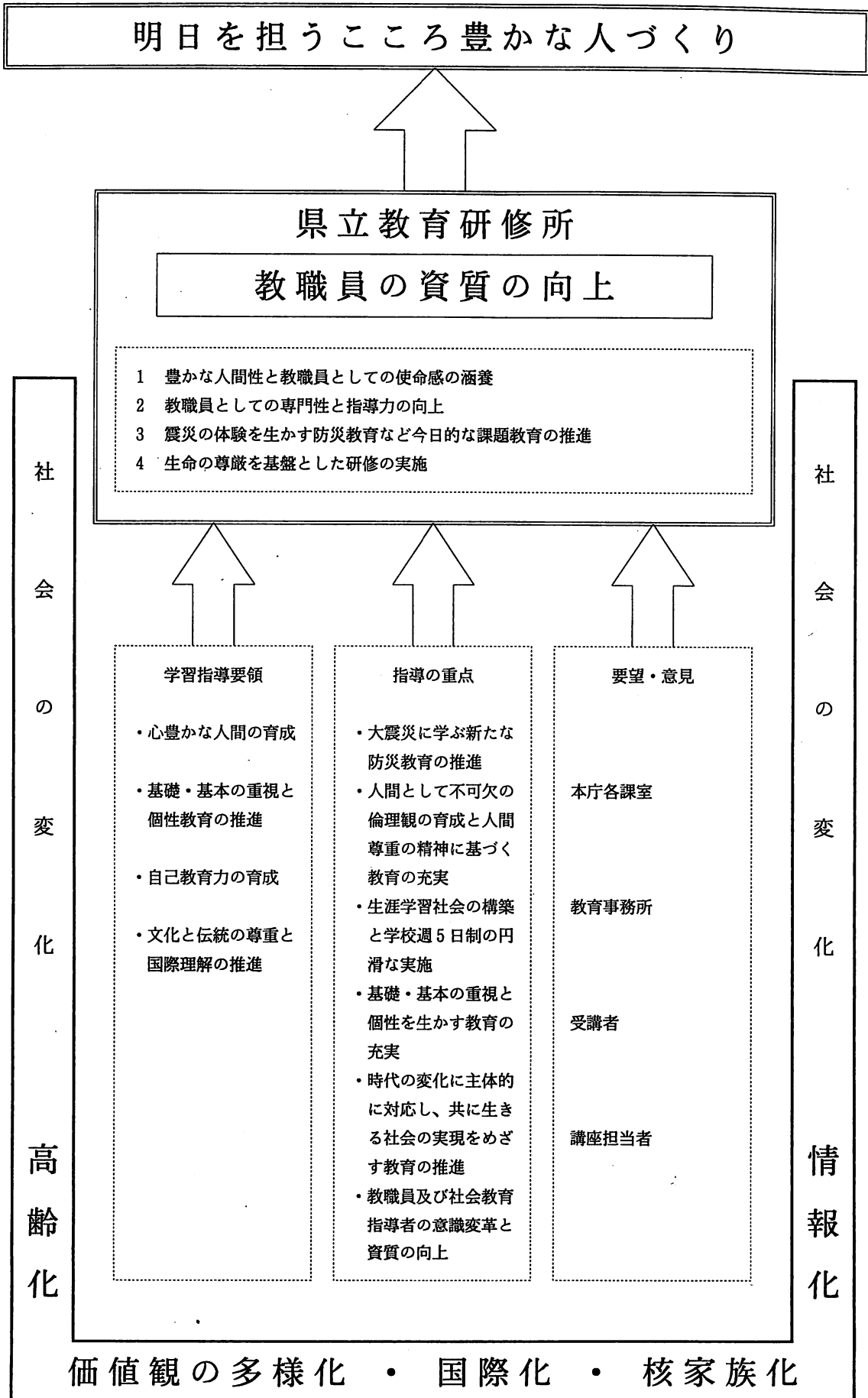
(2) 研修講座の体系

各研修機関では、職務による研修、教科教育の研修、そして課題教育の研修等、様々な研修が多様な方法で実施されている。

当所では職務に関する研修と一般研修に分け、研修講座を実施している。一般研修講座体系は「教科に関する研修講座」「教職に関する研修講座」「コンピュータに関する研修講座」の三つに分け、それぞれの目的に合わせて実施している。

具体的には、「教科に関する研修講座」は、教育活動の中心となる教科教育の研修である。教科教育における研修の目的は、新しい学力観に立つ教育の具現化をめざしたものである。指導内容、方法等について、教員のニーズや、教員に培ってほしい力等の実態把握はもとより、教育課程の実施に向けて取り組まなければならないことに関して、十分に認識し、どのようにすれば効果的な研修になるかをねらいとしている。

「教職に関する研修講座」は、教科教育以外の講座である。教育課程における領域はもちろんのこと、課題教育、教育経営に関するものもここには含まれている。この研修のねらいは、教育の今日的課題に対する認識を深め、実践力、指導力の向上を図るものである。そこでは、教育活動の取り組みにおける問題点等を浮



き彫りにして、その解決に向けて、こうすればできるとか、このようにすればよいといった対症療法的なものではなく、どうあるべきものか、どのようにすれば取り組めるのかということを考えて、実践していく方策を見いだしていくのである。

「コンピュータに関する研修講座」は、課題教育の中の情報教育として考えられるが、学校教育におけるコンピュータ利用の現状や、情報教育に関する教員の意識や実態などを考え、情報教育の推進をより活発化するために、コンピュータに関する研修講座として独立させている。この研修のねらいは、教員の情報機器の活用能力や情報教育の在り方に対する考え方等を、段階的、体系的に取り組むというものである。

当所では、この三つの柱が相互補完的に関連しあう形で実施している。例えば、「教科に関する研修講座」や「教職に関する研修講座」に、コンピュータを取り入れたり、「教職に関する研修講座」に教科教育での実践を取り入れたりして実施している。

各研修機関はより効果的な研修をめざして、各々機関の特色を生かした体系をつくっている。そこでは、各講座毎で目標に沿った研修を行うことになるが、他の講座と相互補完的に実施することにより、より効果的な研修ができ、成果も上がるのではないかと考えている。このような相互補完的な研修体系をつくることも、これからの講座編成にとって必要であろう。

(3) 講座編成の五つの留意点

研修講座の企画立案については、講座編成の体系をもとに、基本理念に基づき、研修の目的、内容等の概要を作成する。

当所では、

- ①研修の目的に照らして、方法・内容を基本的に検討吟味する（過年度の研修に拘束されない）。
- ②講義、実習、演習等の量・時間配分を検討吟味する。
- ③研修した成果が学校において生かせるものとする
(例えば、教材の作成は、講師が単に例示するだけでなく、受講者も作成する)。
- ④指導主事が講義等で活躍する場を確保する。
- ⑥他府県の研修方法・内容等も参考にする。

という五つの趣旨を提示し、実際の講座の企画運営にあたっている。

そこで、具体的に講座を編成するにあたって、先に

述べた二つの視点に基づき、次に掲げる5つの留意点について述べることにする。

<留意点1> 方法内容について

講座を開設するにあたり、どのようなねらいで、どのようなことを研修するのかを明確にしておくことが必要になる。例えば、原理的な事項を研修するのか、実践力、指導力をつけるのか等、研修の目的を明確にすることである。また、受講者の経験年数や、人数により講座の内容を変えたり、実習、演習等の方法を取り入れることによって、講座をより充実したものにするといった思い切った取り組みである。教員の意識の変革や、資質能力の向上をめざすための方法や内容の工夫改善が研修企画する側に求められる。

<留意点2> 内容の量・時間配分について

時間枠に拘束されず、内容に応じて時間を変更したり、内容を変更したりすることも研修にとって大事である。外部講師を多くして講座を運営していると、時間的に制限されたり、研修途中での質問や、出てきた課題に対応することも不可能なことが多くなる。そこで、形態・時間・内容・量などに柔軟性をもたせることが必要になってくる。与えられるたり、教えられたりする研修から、求めたり、考えたりする研修の場を設けることによって、時間的に余裕ができ、その時々疑問や課題に対応できるというような研修が可能になってくる。このような講座編成もこれからは必要である。

<留意点3> 研修の成果の活用

多様な実践報告等が講座の中で発表されている。先進校から学ぶことは大切なことである。しかし、学校の環境、児童生徒の実態等、学校によって違うため、自分の学校に持ち帰ったところではなかなか使えるものではない。学習指導は、学校や児童生徒の実態に応じて計画されなければならない。参考になる実践をもとに、自分の学校の状況や児童生徒の実態に応じて教材、教具あるいは指導案を作成していくという研修をすることにより、授業の改善工夫、さらには教員自らの意識の変革にも取り組めることになる。また、先進校に学ぶだけではない。教員が、多様な学習方法、教材教具の作成、指導方法等、日頃から研究に取り組んでいることを研修の中で修正、加筆しながらよりよいものに仕上げていくことも研修の大きな要素となる。

＜留意点4＞ 指導主事の活躍

留意点2で時間枠に拘束されない研修も大切であると述べた。そのためには指導主事の活躍の場を多くすることも一つの方法である。指導主事は、教育の今日的課題の解決に向けて、研究テーマを掲げ研究に取り組む。もちろんこれらは研修講座の中に生きてくる研究であることが望ましい。また、新しい学力観の具現化をめざして、多様な学習方法、評価、指導の仕方等の研究や、自分の開発した教材を、積極的に講座の中に取り入れるような工夫や改善も必要となる。そのためには、指導主事自ら自己研鑽を積み、今日的な教育課題について共通認識し、その解決のために所内研修等に取り組むことも大切なことである。

＜留意点5＞ 他の研修機関に学ぶ

各地の教育研究所、センターでの発行物や視察研修等で研修機関における研修の実際を知ることがある。研究と研修が一体化した例で、日頃から指導主事が地域素材を使って教材づくりに取り組み、その教材をもとにした学習指導の研修を企画している。そしてその教材を受講者に披露し、それを参考にしながら、受講者が地域にある素材を使った教材づくりに取り組むといった研修をしている機関がある。

また、2泊3日の研修講座で、1日を午前午後の2コマの研修にして、3日間で6コマの研修を組んでいる。その内の1コマは外部講師を招聘し、その講座の課題提供にしたり、まとめにしたりしている。その他のコマは、全て指導主事が担当し運営している。指導主事は、受講者がその講座で研修したことを持ち帰って、学校で実践できるように講座資料や、講座記録ノートを準備している機関もある。担当指導主事は、講座の準備に相当の時間を費やすことになるが、指導主事としての力量を発揮できるという点では研究と研修が一体化したものといえる。

さらに、研修講座で、担当が最も力を入れていることに対して、実施要項に備考欄を作ってPRするといった工夫や、指導主事自らが授業をして、受講者とともにその授業について研究協議を持ち、よりよい授業づくりに向けて研修に取り組んでいる機関もある。このように他の研修機関の講座の実際から十分に参考にできるものもある。

研修機関の役割は、教員の専門性を高めたり、人間

性の涵養に努めたりするための場の提供である。そのためには、研修の基本理念の確立や、体系の整備、さらには講座編成における留意点等を充分踏まえて研修講座を企画し、実施することがこれからの研修にとって必要なことである。そこでは研修の中核施設として教養審の観点に沿って、研修プログラムの工夫改善や、地域の研修の全体を見据えていくことも大切になってくる。これらすべて加味した上で研修を考えることが研修機関としての役割であると考えている。

3 望ましい研修

研修の視点、研修講座を編成するにあたっての体系や趣旨について、当所を例にとって述べてきた。では、望ましい研修講座とはどのようなものかということについて考えていくことにする。

研修とは、義務や責務とするのではなく、教育という大事な職務にある者にとって、研修の必要性を感じ、自ら主体的に行うことにその意義を見いだすことができるのである。そこでは、日頃から研修を企画する側の意図と、教員が研修に何を求め、取り組もうとしているのかということが、何らかの形で一致しておく必要がある。いくら研修を重ねても、このことが十分に研修企画する側、研修する側に浸透しないかぎり、本当の研修とは言えないのではないだろうか。

研修講座を考えるにあたり、各地域や学校で実施されている研修状況を十分に把握し、研修講座の企画をする必要がある。そして、受講者のニーズに応えるだけでなく、各研修機関が研修機関としての役割をより深く考えることも必要なのである。すなわち、教育の今日的課題の把握と、教職員に今求められているものは何か、さらに各研修機関で行うべきことは何かを考え、その課題に対応した研修を企画することである。

(1) 講座編成

研修の実施にあたっては、研修を担当する側が、教育の今日的な課題は何かを常に把握することが必要になる。そして、どのような方向に解決していくべきかを考え、研修講座が開設されていく。もちろんこれは、与えられ、準備された研修であることが多い。

研修にはねらいや意図があり、それを達成するために内容や方法が考えられ、実施されるのである。しかし、与えられたり、準備された研修であっても、研修

の仕方によってその内容はずいぶん違ったものになる。

先に研修における視点を二つ設定した。それらは、具体的な研修内容ではなく、主に研修に臨むための教員の姿勢、資質に関するものである。新しい学力観に立つ教育の具現化においては、教員の意識の変革がその大きな要因になるといわれている。これからの研修講座にとっては、この2点を十分に意識し、加味した上で研修講座を企画立案することが必要であると考えている。

そこで、研修講座の企画立案をするにあたって、次に示すような研修の構造図（右図）を作った。

一人一人の教員は、日々の教育活動の中で、教育における様々な問題にぶつかる。その個々の問題が、幾多の実践を通しながら一つの課題として焦点化された時、研修の必要性が生じてくる。すなわち、教員側からのニーズとして、研修が求められるのである。そこで、課題を解決するために、計画された研修講座を受講することになる。

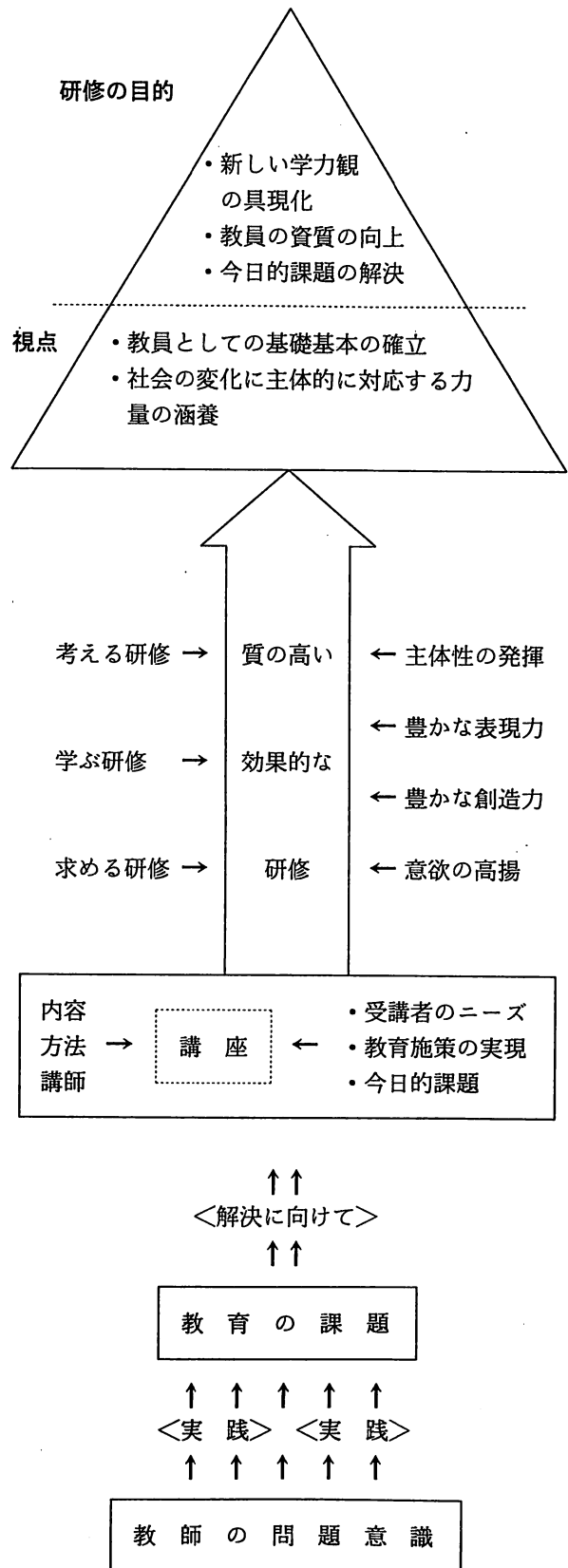
研修講座は、受講者のニーズに応えることはもちろんのこと、教育施策の実現をめざすもの、今日的教育課題の解決に向けたものなど、様々な目標に応じて意図的に企画されている。そこでは、教員の課題意識をより高めるための研修内容、研修方法及び講師の選定等、講座目標の達成をめざし様々な創意工夫された研修講座が提供されるのである。

受講者各人の問題意識は、それぞれ違っている。問題を解決するためには、画一的な方法や運営ではなく、それぞれ受講者の研修課題に応じた方法を用いることも必要になる。

与えられる研修から学ぶ研修へ、教えられる研修から考える研修へといわれているが、主体的な研修を企画することが、我々研修に携わるものの責務である。旧態依然とした研修ではなく、研修講座の企画の段階で、研修方法や内容に何らかの工夫改善をしていく、まさに、新しい学力観に立つ研修の在り方の実現をめざすことが、これからの研修講座にとって大切なことである。「研修を受けてよかった。もう一度受けてみたい」と思うような研修を計画することである。

研修については、組織とも関係するが、できれば研修講座の企画立案にあたっては、準備時間を十分に取、担当相互の共通認識のもとに周到に企画されるこ

研修の構造図



とも大切なことである。人的、物的な裏付けも必要であろう。しかし、現況の中からでも、見方、考え方を

少し変えるだけで、新しい取り組みもできるものである。どのような講座を、どのような内容・方法で実施していくのかを十分に検討し、吟味して開設されていくというのが、これからの研修の在り方ではないかと考える。

(2) 講座企画の具体化

研修講座の企画立案にあたり、どのようにすればよいかについて具体例を示しながら考えることにする。

例えば、教科教育に関する講座では、どのように指導したらよいのかという指導力や、実践力を高めるための方法・技術や知識を提供するだけではない。指導にあたるためには何が必要なのか、どうすることが指導上大切なことなのかといった概念論をもとに、教科指導についての認識を深め、考え、創造していくといった内容が必要になってくる。

それは、教員が目前にいる無限の可能性を持ち備えている児童生徒に対して、画一的な学習指導や一斉指導などの旧態依然とした学習方法をとるのではなく、児童生徒の個性や能力に応じた学習指導を進めるための指導内容や、指導方法等に関することを、研修を通して考えていくことなのである。

目的や内容によってその仕方は違ってくる。研修の過程でのつまづきを、研修を通して解消していきながら、実践力を高めていく。そこには、主体的に、意欲的に取り組めるプログラムも用意されなければならないし、教員自らが柔軟な思考や、豊かな表現力、創造力が発揮されるような場の設定も必要になってくる。

与えられる研修というより、考える研修、学ぶ研修、求める研修の形態を確立することである。その根底に流れているものは、教員自らの生き方や、人間としての在り方であり、それらが学習指導の場に現れるということを教員自身が十分に認識する必要がある。そこには、教員が変われば、児童生徒も変わるということ、研修のねらいに位置づけ、教員自らの自己変革を促し、ひいては、教員の資質能力の向上につながる講座をめざさなければならないのである。

また、これからの学校教育においては、国際化、情報化、高齢化等といった社会の様々な変化に主体的に対応し、そこで起こってくる課題に対して、自ら意欲を持って解決する力を身につけ、共に生きる社会の実現をめざす教育の推進が求められている。そこには、

心身ともに健康で豊かな人間性を備えた児童生徒の育成をめざす教育が必要となってくる。そのためには、教員自らが社会の変化に主体的に対応できる資質能力の向上に努めなければならない。

研修においても、課題が設定されるに至った過程や、課題の意味を考えることから始める必要がある。そして、その課題がどのような形で学校教育にかかわってくるのかを明確にし、教育課程の中で、どのようにそれを推進していくかということの研修が求められるのである。すなわち、それは、社会の変化に主体的に対応していく教員の在り方に関する研修なのである。

研修を考えるためには、もう一つ大きな要素がある。それは、指導主事自らの研修が必要であるということである。教育の今日的課題についての認識はもとより、その解決に向かっての方策を見いだす研究が必要である。そこには、行政的な立場に立った考え方や、学校の実態を把握し、今求められているものは何かを絶えず認識しておく必要がある。そして、指導主事自ら高い見識を持ち、専門性に裏付けされた教育情報等の収集に努め、いつでも、どこでも新鮮な、また適切な指導助言や、情報提供ができるように自己啓発・自己研鑽に努め、いつも謙虚に自己評価を行い、自らの資質を磨くことも大きな要素となるのである。

国際日本文化研究センターの所長河合隼雄氏は、研修については、講義のし放しではなく、後で個人的な話し合いもできること。教育の問題は具体的に ついで話してこその研修の意義もあるという。

教員の研修に対する姿勢は、何かを教えてもらいたいというより、自分で考える示唆を与えてもらいたいという思いが強い。講座の在り方も、教員の要望に応えるために、企画の段階でなんらかの工夫改善を試みなければならない。教えられる研修から考える研修への転換も必要であろう。与えられる研修から主体的に学んでいく研修、求める研修への転換も必要であろう。いずれにしても、研修を企画運営する側に、研修方法の工夫改善が求められているのである。まさに新しい学力観に立つ研修の在り方である。社会の変化に対応する研修の在り方である。

研修が厳しくても、辛くても講師とのふれあいの中で、自分の日頃の思いを十分に話す事ができ、また、話すことによって自ら解決していくこともある。教員

自らが意欲を持って、主体的に研修しようとする場や内容を設定することにより、望ましい研修が設定されるととらえるのである。

(3) 研修講座の企画<教科教育の場合>

これまでに述べてきた研修の在り方に基づいて、具体的な講座の企画例を提示し、望ましい研修講座について教科教育の研修講座を例に考察する。

教科教育における研修の目的は、新しい学力観に立つ教育の具現化である。児童生徒の個性や能力に応じた学習指導を進めるための指導内容や、指導方法等に関することを、研修を通してより深化させていくことである。

講座編成にあたっては、教員のニーズや教員に培ってほしい力等の実態把握はもとより、教育課程の実施

に向けて取り組まなければならないことに関して十分に認識しておくことが大切である。教科教育は、教育活動の中心的なものであるため、指導内容、方法等についてどのようにすれば効果的な研修になるかを考えなければならない。

内容では、研修講座の全体像をつかみ、研修目標に沿った内容が設定されなければならない。教科指導において教員に求められているものは何かを把握することが大切である。

運営については、画一的な方法や運営ではなく、受講者の研修課題に応じた方法を用いることが必要になる。受講者が主体的に、意欲的に取り組めるプログラムが用意されなければならない。

<講座企画例> 2泊3日の講座

研修目的	教える教育から学ぶ教育への転換を図るために、学び方を教える教科教育の在り方を研修し、新しい学力観に立つ教育の推進をめざし、教材観、指導観、評価観の確立を図る。	
	留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の实態把握に基づいたもの ・教育の課題認識となるもの ・講座担当者の意図が反映したもの ・めざす児童生徒像に関するもの ・講座の中心は「学習指導の実際」で、主体的、意欲的に取り組めるもの
研修内容 と方法	内 容 ・ 方 法	講 座 編 成 ・ 運 営 上 の 留 意 点
	講義 「指導方法についての総論」	<ul style="list-style-type: none"> ・研修の目的、流れを再認識できること。 ・方法論ではなく、概念論の講義であること。 ・学習指導についての認識を深める。 ・受講にあたっての課題を提示し、次の演習、協議につないでいけるもの。 ・講師としては大学の教官か指導主事が望ましい。
	講義・演習・協議 「学習指導の実際」 単元（題材）の設定 指導目標の設定 教材の選択 多様な指導方法 評価の在り方 など	<ul style="list-style-type: none"> ・講義を一つの視点とする。 ・視点を明確にして、考える基本を示すことができる実践例を提示する。 ・各人のテーマに沿った単元で学習指導計画を立てる。その際、作成の留意点、意図、設定の理由等を明確にする。 ・その過程で出てくるつまずきや、疑問の明確化し、一般化できる問題は提起をして、協議や講義に変更

		<p>し、課題の解決に取り組む。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 学習指導についての課題を見つけ、自ら解決の糸ぐち探りながら実践力を高めていく。 • グループ活動等も取り入れ、多様な研修方法を模索する。 • 外部からの講師より、指導主事の対応が望ましい。
	<p>講義・協議 「学習指導における課題と展望」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 講義、演習、協議を通して浮かび上がってきた課題を、協議を通して、各人なりに解決する方向性を見つける。 • 学習指導の実際を通して、課題の解決方法を提示する。 • 留意点を明確にする。 • 今後の学習指導の在り方について共通理解を深める。

おわりに

研修の在り方を考えるにあたっては、研修講座だけを考えていてもどうすることもできない。ちょっと見方や考え方を変えることによって、研修の在り方にも工夫改善が見られるのではないかと考えている。

新しい講座を開設するためには、前もって共同研究で取り組み、それをもとに講座を開設していくことも時には必要となる。個人研究や共同研究が、社会の変化を敏感に感受し、教育の今日的課題の解決に近づくようなものに取り組むならば、自ずと今日的課題に即した講座の企画もできる。そして、指導主事に課せられた日頃からの研究と研修講座が補完的に作用したときに、望ましい研修にすることができるのではないかと考えている。

研修機関の役割というものをもっと明確にしながら考えていくためには、他の機関や学校における研修の実態、内容方法等の具体的なものを調査していく必要がある。このことは今後の課題として、今回は当所研修企画例を取り上げながら、研修機関における講座の在り方をまとめた。

参考文献

- 文部省『文部時報』No.1424 1995
- 教育開発研究所『教職研修12月号』 1989
- 河野重男 主原正夫 牧昌見編著『教職研修必携』第一法規 1981
- 『新教育学大事典』 第一法規 1990
- 中留武昭編著『教育実践に生きる研修』 学校改善実践全集15 ぎょうせい 1987
- 兵庫県立教育研修所『平成5年度研究紀要(第105号)』 1993
- 兵庫県立教育研修所『平成6年度研究紀要(第106号)』 1994
- 兵庫県教育委員会『平成7年度指導の重点』1995

共同研究者

田中 廣喜	廣岡 徹	小林多津子
越智秀三郎	横田 政美	吉川 昭吉
稲葉 達雄	笹倉 邦好	